

1. 皆さん、こんにちは。本日は、このシンポジウムに招待いただきまして有り難うございます。日本大使館を代表して一言ご挨拶申し上げます。

2. 我が国は、チェルノブイリ原子力発電所核惨事による被災者の方々への医療支援が現代世界の人類の最も重要な課題の一つであると考えてきました。

3. チェルノブイリの核惨事について、我々日本国民は、このテーマの持つ深刻さについて世界中の人々が正しく理解することを強く希望してきました。このシンポジウムにお集まりの皆様にはよくご存じのように、核惨事というのは5年や10年で収束する性格のものではありません。チェルノブイリの事故23周年にあたる今年の4月に、ベラルーシのある専門家が「ベラルーシにおける放射能汚染の状況は、23年前に比べて、決して改善していない」との趣旨の発表を行っていました。このことが真実なのか否かについて、私はデータを持ち合わせていませんので知りませんが、一つだけはっきりしていることがあります。それは、チェルノブイリ事故のような巨大な核被害の影響は文字通り甚大であり、これからもその否定的な影響は数世代以上に及ぶということ、この影響の克復には長期にわたる取り組みが必要だ、ということです。

4. この点は、我が国の広島と長崎の経験、原子爆弾により被爆した数多くの人々が長期にわたり苦しく困難な生活を余儀なくされた、と言う事実には照らしてみれば明らかです。

5. 我が国の場合、原子爆弾が投下されて以来、60年以上の歳月が流れました。そして、被爆者の救済のために多くの努力がなされ、膨大な金額が費やされました。しかし、数多くの被爆者が、または被爆者の子供達や孫、曾孫たちが、今日においても健康に不安を抱きながら暮らしています。このことは、日本社会にとっては忘れることを許さない、日々の現実なのです。

6. 現在、世界には多数の原子力発電所が稼働しています。また、今後とも原子力発電所の建設が続くものと思われます。このような状況にあって、核被害をいかに克復するか、はベラルーシ（そしてウクライナ、ロシア）と我が国の国民にとどまらず、世界の諸民族にとっても非常に切実な課題であり続けています。

7. 私はこの二年の間に、モギリョフ州とゴメリ州にあるチェルノブイリ被災地区の10以上の病院を訪問しました。これは、日本政府からチェルノブイリ被災地区の病院に対する支援としての医療機器の供与のためです。その中で私は、チェルノブイリ被災地区の病院や診療所（ambulatoriya、feljdshersko-akusherskii punkt）において、ベラルーシ人のお医者さんも看護婦さんが非常に良心的な勤務をしていることに強い感銘を受けました。

我々日本国民は、この巨大な核被害を克服しようとして日々努力しておられるベラルーシの人々に対しては特別の敬意を抱いております。

8. また、ベラルーシにはこの核被害により被災した多くの人々を救済しようとして活動している政府の組織と非政府の組織があります。さらには、これらの救援組織を支援することを目的として募金活動を行っている外国の政府組織、非政府の組織もあります。

これらの善意の人々にも深い敬意を表明したいと思います。

9. 繰り返しになりますが、チェルノブイリ核悲劇の克復には多くの年月と多額の費用が必要とされています。これまでに達成された成果も小さくないものと思いますが、核被災地域の人々が本当に安心して暮らせるようになるには、まだまだ多くのことがなされねばなりません。

10. 日本政府は、チェルノブイリ核被害の克服に向けて、今後ともベラルーシ社会との協力を進めていきたいと考えています。

11. 今回のシンポジウムが、チェルノブイリ核事故の克服に向けて実りある成果をもたらすことを強く希望いたしております。

ご静聴ありがとうございました。（了）